

第2回大阪府市統合本部会議

1 開催日時

平成24年1月12日（木） 11:00～12:30

2 場 所

大阪府咲洲庁舎50階 迎賓会議室

3 出席者（名簿順）

松井大阪府知事、橋下大阪市長、小河大阪府副知事、山口大阪府PT長、京極大阪市PT長、上山特別顧問、古賀特別顧問、堺屋特別顧問、原特別顧問、北村大阪市計画調整局長、中村大阪市計画調整局科学技術振興部長

4 議事概要

（山口PT長）

それでは、ただいまから、第2回大阪府市統合本部会議を開催させていただきたいと思っております。本日はお忙しいなかにもかかわりませずお集まりいただきまして、ありがとうございます。なおご出席の先生方については、本来ご紹介すべきところがございますけれども名簿をお配りしておりますので、それに代えさせていただきたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

それと堺屋先生はおってご到着されるということですので、先に会議を始めさせていただきたいと思っておりますのでよろしく申し上げます。

それでは本日二つの議題、大阪のランドデザイン、大都市制度に関する条例案についてという、二つの議題を用意させていただいてますけれども、次第に従いまして会議を進行させていただきたいというふうに思います。それではご案内のほうでは今回12時までということになってますけれども、最大限、12時15分ぐらいまでですね、ちょっと延長させていただく場合があるということで会議進行させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いたします。

（橋下市長）

あんまり行政的なことを僕らがやってもしかたないので、方針決定とか政治判断が必要なところにしておいてですね、最後はみなさんでやっておいてもらったらいいと思います。

（山口PT長）

わかりました。そこは段取りさせていただきます。

それでは次第に従いまして会議をやらさせていただきます。まず、一番目の大阪のランドデザインについてまず小河副知事のほうからご発言をお願いしたいと思います。

（小河副知事）

ランドデザインということで、今日これの中身がどうこうというのではなくて、大きな、われわれが取り組もうとしている方向性をご説明し、議論させていただきたいと思

っています。まず、前回の本部長ならびに副本部長の命でございますので私に取りまとめ役をさせてもらうということでございます。今回の大阪のグランドデザインといてもわれわれが扱ってきたのは、やはり強い大阪を作っていくためのいわゆる社会基盤整備、それから街づくりの整備といったことを主に、あるべき姿、大阪の将来あるべき姿、それから大阪がいきいきとしているんだということをアピールできるようなビジョン、それをやっていけたらなという大きな方向性。ですから、産業とかいろんなほかの分野、そのへんは連携しながら、全部手を出せませんので、連携しながら最終的にこういうところであげていったらいいかなと思っております。

その検討にあたりましては、そういう意味で、私と、市は副市長がまだいらしゃいませんで、私のサブということで計画調整局長にやってもらって、どちらかという市の方は計画調整局の人とかいらしゃいますので、技術系を中心に、大阪府におきましても、街づくり系ということで住宅まちづくり部、都市整備部も入れて、チームを作りたいと思っております。今日そういう形でいくということで了解もらえたら人選したいと思えます。

これから検討する、あとで局長のほうからありますけれども、範囲としては全大阪府域というよりは、視点としては広域的長期的な視点でみますけれどもいまの大阪市を広げたインナーエリアというような感じのエリアを対象にしていきたいなというように思っております。これから考えていく視点ですけども、やはりいままではわれわれはどちらかという供給側、行政側、右肩あがりの流れで造ってきたということで来てます。ストックはできております。それを今回はそうではなくて、需要者側、利用者側という立場で見直して、そういう既存ストックの再利用の視点と、そういう視点でやっていきたいなと思っております。それとやはりこれからの大阪は緑というのがひとつのキーワードにしていきたい、やはり、大阪に人が、都心に人が戻ってくるという、そういうことをキーワードになるとおもっています。工程的には3月末をめどに素案出して6月にほかのといっしょに、最終案をまとめていきたい、そういう感じで検討して行きたいと思っております。

それが、まとめですけど、その後につきましては、われわれが実施していかなければならないので、それは後に実施本部をつくるのかどうかは会議で決めて、実践、行動していく体制も考えていきたいと思っております。以上大きな話です。あとは計画調整局長の方から説明します。

(北村大阪市計画調整局長)

大阪市の計画調整局長の北村でございます。よろしくお願いたします。

それでは、早速ですがお手元の資料に基づきまして、説明します。

(橋下市長)

その前に、いいですかね。なぜ、こういうグランドを作ろうという話になったかといいますと、いま小河副知事がいわれたようにいままでは、いまの行政区の大阪市の枠でビシャッと役所の縄ばりといいますか、そういうものがきまってしまってますね、実際の都市のまとまりは、小河副知事がいわれたようにインナーエリアって言うか、大阪市のエリアを越えて周辺の市町村を全部含んだかたちで一定の都市の実態としては、そこまで広がっているにもかかわらず、境界線が、大阪市という境界線が引かれていること

によって、行政が分断されていました。ですから僕は知事になって、大阪のいろんな物事を考えていくときに、いまの政令市制度のもとで、別に僕は政令市を否定しているわけではないんですが、都市の実態に行政の枠があっていない。都市の実態は人口集積とか人の移動とか事業所集積で考えると、大阪市の周辺もよく大阪都構想でいわれていた、あそこのまんなかの部分、インナーエリア、グレーター大阪でしたか、大阪府域というよりも大阪市を広げた形のグレーター大阪に行政の枠があっていないといういまの現実があるので、それを府と市とせっかくこういった形であわさった府市統合本部ができましたので、大阪市という境界線にとらわれずに、いわゆるグレーター大阪といいますか、大阪市とその周辺市町村、いわゆる都市の密集地、集積地ですね、ここをひとつのエリアととらえて、戦略を練ろうと、いまは、繰り返しになりますけれども、いままでは大阪市の境界線で分断されていたので、大阪市と周辺部をあわせた大都市の部分についての総合的なランドデザインができていなかったのをそれをつくりたい、それをつくらないと、うめきたとか大阪城の周り、周囲の森之宮地域とか、そのほか夢洲、咲洲も位置づけられないということでランドデザインを作りたいということを知事に相談して、知事が了承していただいたということです。ですから、大阪市の境界線ということを取っ払って、まずはエリアをですね、いま小河副知事が大阪市内とその周辺市町村といたしましたけど、対象地域だいたいどの辺りをターゲットにするかをまず決めていただいて、たぶん能勢から岬まで含めてじゃないと思いますんで。

(小河副知事)

イメージとしては大阪中央環状線の中というイメージでだいたいと考えています。

(橋下市長)

そこに府と市があわさってデザインを作ってもらって、そこに拠点、街づくりと広域インフラを位置づけていただくと、もうひとつはぼくの時代認識なんですけど、北村局長と、今日ここでも、大きな話を議論させてもらいたかったですけどね、高度成長時代にずっと作られてきた大阪のまち、まさに堺屋先生が万博時代からひっぱってきた大阪のまちの状況、千里ニュータウンも含めて大阪の都市構造というものを高度成長が終わってですね、人口減少社会に入ってくる、そういうところを踏まえて、僕は都市構造を転換せなあかんと思ってまして、特に御堂筋なんていうのをいままでと同じようなあのようなオフィス街でいいのかと。北村局長から話を聞くと、やっぱりあそこはいろいろ企業の要望もあってああいう形ですけれども、本当にそれでいいのか、それをもうちょっと、大阪市内の図でくると御堂筋だけの図で来るんですけども、もうちょっと広げて考えて、このエリアはもっと違う道を歩んでいくべきではないのかとかですね、端的に言えば、ここほんとうにオフィス街だけでいいのかと。要は人口減少社会を迎えて大阪の都市構造このままでいいのかという視点で、もう一度、今までの考え方をリセットして、大阪の都市構造といいますか、都市の在り方を考えたいというふうに思ってます。ですから、今までの連続性のなかでまちづくりを考えるのではなくて、一旦リセットして人口減少社会をとらえて、やっぱり30年後、40年後に向けてですね、ものを考えてもらって、その方向に向かって、道路だったり、インフラだったりそういうものも考えていくというようなことで、今回のこの大阪のランドデザインというものを、問題提起をさせてもらったというところなんです。ですから、北村局

長には、むしろ細かな話というよりも、いままで大阪市というものがどういう視点で大阪の都市計画といたしますか、まちづくりを考えてきたのか、ということのそちらの話を、個別の話は資料を読めばあれですから、どういう視点で大阪を作ってきたのかというところの話をいただきたいんですけどもね。

(北村局長)

それでは、資料は1の2なんですけども、そういう形ですすめさせていただくとして、資料のご説明ということではなしに、やらしていただきたいと思います。やはり今日の会議の部分で、作業を進めていくと言う立場の人間として、先生方ですね、ご意見をいただきたいところがございますので、特に資料の部分でいいますと、1ページ目のまんなかにございます、新たな街づくりの視点、さきほど小河副知事のほうからは供給者側の論理じゃなしに、需要者側の論理でいくとか、ストックの組み換え、活用といった話がありましたけれども4点ほどあげております。それから右端に検討課題という、いま市長がおっしゃった都市構造に関する検討をやっていきたいというなかで1ページの下のほうに都市構造、左側に検討内容とございますけれども拠点エリアの整備の方向性と全国、関西を視野にいれた都市軸、これは交通インフラの話になると思いますけれどもその充実・強化といったところでの検討を進めていきたいなということでございます。

それから街づくりの推進のほうは拠点のほうになりますけれども、次のページのほうに、ちょっと事例として一番左の上の左の端のほうに拠点の名前をいれさせていただいておりますけれどもたとえばめきた2期開発区域を中心とした大阪駅周辺地区とか中之島4丁目、これは国際会議場からちょっと東のほうにいった中之島のエリアでございますけれども、森之宮とか大川沿いの大阪市の公館周辺、川口地区などを対象にしながら、右にございますようなたとえば御堂筋であれば大阪全体の軸とした街づくりの検討みたいなのをやっていきたいと考えております。

(橋下市長)

これはちょっと行政的な話ですから、大阪の課題をですね、いままでの大阪がつくってきた都市構造について、何が問題点なのかっていうことを堺屋先生とかですね、大きな話で、いまの大阪、こういう都市構造のまんまで進めていくのになにか問題って舵をきらなあかん部分っていうところをどういうふうにお考えなのかっていうのを

(堺屋顧問)

私も今日資料を提出しておりますけれどもその後半に書いてある、大阪のグランドデザイン、大阪都はなにをめざすのかという最後のページがございますけれどもやはり、大阪都というものは、法的措置、大阪都市のビジョンと、財政改善、府市政一新とかいてありますが、その最後のページのところに、グランドデザインの話、いま話題になっております、グランドデザインの話が書いております。私、万国博覧会の前からずっと大阪市のこういう都市計画を見せていただいてきておりますけれども、あの、ハードの作り方とソフトの作り方と両方あるんですね。私たちは、こういう万国博覧会から、沖縄観光開発その他さまざまな経験を経まして、やはり、この、いわゆる精神的目標というか、何をめざすかというビジョンですね、これがやっぱり一番大事なんです。

こうやってみると、成長時代とどこが違うかっていうのが非常にわかりにくいんです。

まず第一に、大阪都を成長都市、国際競争に勝てるまち、効率、安全、楽しさをもった大都市だということをはっきりしなきゃいけないと思います。大阪市では集客都市とかいろんなことをおっしゃいましたが、総論と各論がまったくあってないですね。集客都市といいながら、たとえば映画ブラックレインのときなどはことごとく撮影禁止にしちゃうっていうような、カーチェイスを撮らさないという、標語と実態に格差のある話が多かったです。これをまず明確にすべきであるとおもいます。

成長都市として国際競争に勝てる効率、安全、楽しさをもった大都市とする。したがって、経済成長目標は成長都市ならやっぱり成長として名目3%くらいは必要だと思います。それから、人口を減らさないこと、自由化によって若者の比率を保つ、市場を広げる非常に重要なことで大阪の市場規模っていうのはどんどん縮小して、東京の市場圏がひろがってきております。近く敦賀まで新幹線が通ります、そうすると、東京経由で敦賀に行くんですね。長野県っていうのは、昔は愛知県、岐阜県、長野県と続いていたとおもっていたのが新幹線で東京経由に行くようになってくるわけですね。そうすると長野は完全に東京市場圏になる。金沢もそうなるのではないかという心配があります。あとわずかなので、敦賀から米原または京都につながるのが大きな問題だと思います。また、東海道が危険になったとき、富士山が爆発したときには迂回路がないといかんとおもいますが、そういう成長都市のデザインをどう作るかという話。

第2番目には、便利な省エネ都市の作り方です。市内交通の相互乗り入れというような交通条件を改善すること、それから都市域の集約と混合化、これは、10年前に私が閣僚のときに出しました、「歩いて暮らせるまちづくり」という概念ですが、最近は集約都市というようなこともいわれておりますけれども、ひとつのまちに住宅も商店も学校も病院も役所の出張所も2キロ以内に集める街づくりを考えるという考え方なんです。

それから、便利な省エネ都市っていう、これは、それから、まあ日本一明るい町を作るのを目標にすべきです。

現在の改革プロジェクトを整理し、重点化をしなければいけません。たくさんのプロジェクトがあり過ぎです。北の彩都の話から南の方までなどわかれておりますけれども人口減少社会にあってどれくらいに集約するかが問題です。

三番目はハでございますが、知恵の集まる情報都市にしなければならぬ。いわゆる知価創造のできる知価都市にしなければいけない。そのときに基礎教育の徹底、教育基本条例、小中学校の統合・集約、それから、市内への大学の誘致、研究機関、経済文化調査機関、これが現在全国経済見通しを発表するところが東京にしかございません。こんな国は世界中でめずらしいんですね。それから情報発信機能。これはテレビ局、インターネット局、それから先物取引、これの発展をめざさなければならぬ。これは日本全国の話として、先物取引はきわめて重要です。

また、ニとして、楽しい都市。イが成長都市、ロが便利な省エネ都市、ハが知恵の集まる情報都市、そして、楽しい大都市を作る。このためにまず名物作り。観光バスが復活するようなワクワクした都市を造らなければならぬ。このために10大名物を作ろうということでもあります。梅田の今の北梅田ですね。安藤忠雄さんからも提案が出ておりますが、市長のおっしゃる森林と経済性をあわせて北梅田空中森林をつくらうということでもあります。これは絶対に世界的名物になるとおもいます。それから、御堂筋をデザイン・ファッションストリート化するということでもあります。その次は既製の名所、大阪駅前のストリートコンサート、これも前の磯村市長のときにやりかけましたけども

やめました。それから、南港の名所化ですね。

交番、これは毎年いくつか建て替えやっとするはずですが、デザインコンペを毎回やる。東京でも一度やりまして、かなり建築家を育てました。それから大阪都のために、発足を記念して4年後に。道頓堀を遊泳地にする。そして、大阪城で大博覧会をやる。これも安藤先生から提案が出されて送られてまいりました。そして、何よりも大事なのは、最後なんです、小さな行事をバラバラやらずに世界的な発信行事、儲かる行事ということです。私は万国博覧会をプロデュースして、192億円を儲けましたし、おととしの上海万国博覧会で日本産業館は25%の高率配当してます。だから、代理店に頼らずに自分でやらなきゃいけないとおもいます。そのために、大阪市、大阪府でプロジェクトチームを作っていて、私らがやったような厳しいプロデュースを都市全体にやってもらいたい、お金のもうからないものは文化ではないというのが大前提でございまして、それだけ大衆にうけていないということでございますから、補助金行政よりも儲かるような仕組みをつくっていくと、大阪でやったら儲かるよと、全世界の文化人・芸能人がですね大阪でやったら儲かるよと言ってくれなきゃいけないと思うんですね。そういう状態にどうやってもっていくか、大阪には安藤さんも喜多さんも有名な世界的超一流の人材がおられますから、そういう方々でプロジェクトチームといいますか、そういうものを作って、代理店に頼らない、直接のプロデュースをやっていきたくてこう思っているしだいあります。したがって、かなりたくさん資料を送っていただきまして、プロジェクトがあるようですが、やめるものとか、中止するものとか、変更するものとかいうのを選んでこの4年間、大阪都ができるまでの4年間に完全な成長、利便、楽しみの都市に変える必要があると思っています。

(橋下市長)

僕は、朝日新聞が前原ノミクスと枝野ミクスで軸を設定しているのを面白いなと思ったんですけどもね。大阪として、人口減少社会を迎えていくんですけども、爆発的に人口増やすことを目指していくのはもう無理だと思うんですね。ただどこを一定、食い止めるような形で大阪の都市っていうものを目指していくのか、それとも少なくなる方に合わせていく大阪を目指していくかは、大きく大阪を考えていくのにあたって大きく変わってくるので、先生は減らさない、増やしはしないけれども減らさないというくらいですか？

(堺屋顧問)

減らさないと同時に、日本全体では、高齢者の比率が増えてきますから、大阪は若者の比率を保とうとすると、かなり流入人口をいれなきゃいけないと思います。

(橋下市長)

それは人口が減っていったところに、縮小していったところにあわせていく大阪を作っていくというよりも、やっぱり、大都市として維持していくことは明確にして、いわゆる学者さんのなかには、もうそんなことはいいじゃないかと、辺境でもいいじゃないかと、どんどんどんどんちっちゃんくなってそれでいいんじゃないかという人もたくさんいますんでね。方向性としてはそうじゃいけないんだと、いまの日本の国と地方の関係とか、いろいろ税の構造から考えても、大都市がある程度大都市として維持し

て稼いで地方に金を回さなきゃいけないということをしっかり位置づけるかどうかって
いうことなんですけどね。

(上山顧問)

私は今日のテーマ、グランドデザインと聞いたときにちょっと違和感があったのです。日本全体もそうだけど、大阪はグランドデザインを前向きに語れるような状況かと。ただし、会社と同じで常に成長戦略とかコンセプトをガンガンだして前に進まないとやっていけない。IR的な意味では私は必要だとは思いますが、ただ過去のように、アジア一だのといってもしらじらしいです。中身、各論が大事です。あと、大阪の位置づけは全国を見渡したなかでは、かなりまし。相対的に一番ましな町というところちょっと後ろ向きな言い方ですけども。一番インフラも充実しているし、問題も山積だけど投資は終わっているし、東京はちょっと別として、膨大なアセットがある。これをどういうふうに使っているかという点で持続可能性を確保するかどうかということだと思えます。成長しなくていいとは思わないけれども今のままでさらに前に行くには、あまりにも現状が問題だらけではないかと。グランドデザインを出すのはいいけれども、現実的な作業としては、まさにいま堺屋さんがプロジェクトの整理とおっしゃいましたけども、二段階必要な感じですね。プロジェクトの整理も必要だし、地下鉄はボロボロだし、各種インフラに対する投資も足りない。うめきたがいいのか悪いのか別として、新しい地域にこれから投資する以前にそもそもいま住んでいる人が魅力を感じなくなってよそにいつてしまうリスクがある。企業が東京に行く問題なども含めて、日本全体が競争力を失っているなかで、食い止めるための、底支えの投資、インフラのリノベーションに、私はエネルギーをまず割くべきだと思っている。そうしないと事業所がなくなり、雇用がなくなり、人口も減ることになる。具体的にどうするかですけど、西日本の首都をめざす。周りが疲弊していくなかで、相対的に優位性を保って、いろんなものを吸収していく。新しいことをやるっていうよりは、現状雑多なものがいろいろあるっていうのが大阪です。雑多なものがいっぱいあるという大都市の限界性みたいなものをうまく伸ばしていく、そういう戦略だと思う。ロボットとか、バイオとか特定の分野を田舎の県みたいにいわない。分野を決めずに全体的に暮らしやすい状態にする、あるいは企業が立地しやすい状態にする。底上げのほうが大事で、その点検が意外とできていない。これは大阪の傲慢さだと思う。典型が地下鉄とか道路の問題。その部分をしっかりとやるっていうのが実はグランドデザインのベースで、その上で、新しいものなによりやりますかとなる。それはエリア別、分野別だと思う。全体を議論せずに場所も決めたらいい。森之宮周辺とかですね、北ヤードとか、泉北ニュータウンとか。リノベーションでなんか組み替えれば外からお金とか人材がはいってきそうな分野です。土地があまったから何かやるんじゃなく、外からアイデア等を入れればできそうな分野に限って、各論的にプロジェクトを作って議論をしていったらいい。それを全部足した後にグランドデザインになる。小さな市町村みたいな感じで、グランドデザインをどんと明るく出してみても、何だしてもうそ臭い。各論積み上げのほうがいい。北ヤードはあとで各論の例としてでてくると思うが、あれはたまたま土地が空いただけの話。空いた土地をむりに使う必然性はない。1期は駅に近いし、だれが見ても魅力的。しかし、2期は、1期とセットで考える必然性があるのもよくわからない。私はあれは「中津」としか見えない。中津がいいか悪いかは別の話ですが、十三と中津のあり方とか、阪急電車っていうのを考えながらみていかなきゃいけない。話を

元に戻しますと、すでに、いろんな議論がされて、なんとかプロジェクトとか、この場所が空くとかいられているのですが、そもそも投資するのもしないのか、見直すとかやめるとか、そこの作業から入るべきです。

(橋下市長)

ランドデザインも夢物語を描くんじゃなくて、要は、個別の各拠点を進めていくにあたって、ここはどういう位置づけなのかっていう羅針盤ですよ。バラ色の大阪をまたなんかだーっと夢物語をやるんじゃないんです、まず、簡単に言えば、もう一回オフィスビルを建てるとかどうなのかっていう判断をするときに、大阪の全体のいまの都市構造を考えるとどう位置づけるのかとかですね、御堂筋っていうところも大阪全体のなかで位置づけて、あそこはいまのままでいいのか、積み上げるときにも御堂筋だけみてもこれをオフィスにするのかどうするのかっていうのは全体の羅針盤がないと判断できないのかなとおもっていて。なんか夢物語の空想、絵空事を書くんじゃない、そういう意味での羅針盤づくりっていう意味なんです。

(上山顧問)

そういう意味で堺屋さんおっしゃっていたと思うんですが、国土軸がどんどん北に移ってます。新幹線があり、名神がありさらに新名神はもっと北にいったら。関空は南の端にあってバラけていくなかで、南北軸をどうするのかは相当大きな問題です。湾岸は物流と車中心でなんとかなってますけども、人は南北に湾岸で動かない。御堂筋一本足戦法ですね。四ツ橋線なんかは非常に中途半端で北ヤードと四ツ橋の関係なんてぜんぜん議論されてないし、阪急の十三、西梅田と北ヤードの関係っていうのもぜんぜん議論されてない。ですから交通、国土軸です。都市の成長戦略を考えるときに、やっぱり大阪の場合、物流・交通は肝です。そういう意味で関空、新名神といったような全国的なあるいは世界的な人とモノの流れのなかでエネルギーを取り込む入口といまの大阪の関係を考え直す必要がある。そういう意味では御堂筋線だけにたよって過去70年やってきた。それすらも北に伸ばして千里につながったけれども南は中途半端で終わってる。大阪湾と御堂筋の間が非常に中途半端な状態で土地の値段も安い。あそこが空洞化して単に北ヤードに移っていくという問題がある。

(橋下市長)

古賀特別顧問、原特別顧問、外から見て、大阪がいま進んでいる方向で問題点、課題とか、それは交通でも、産業面でもなんでもいいんですけども、いま進んでいる方向で課題点とか、大都市のあり方としてなんですけれども

(古賀顧問)

僕は常に全体の経済状況とかですね、そっちから見ていくんですけども、あの、イメージとしては、大阪っていうのは自由なイメージがあるんですよ。東京から見ると。マスコミなんか東京より自由ですね。町のなかを歩いててもなんとなく雑多なものバラバラとあるという感じがあって、それは全体として栄えてるっていう雰囲気があるっていう、そこらへんが、なんていうかな、とらえどころがないというのが大阪かなと。ただ、経済って言う観点から見ると、上山さんが非常にインフラもいいし、恵まれ

た状態にあると、ただ、それは相対的な状態であるとおっしゃったけれども、まさにそのとおりで、要するにいままでずっと東京に次ぐ第二の都市っていう位置づけに満足してる感じがあって、日本全体が沈んでいくなかで、でもその中で「2番ですよ」ということで続いてきたと思うんですが、ですから、日本全体がほんとにどうなるかわからないっていう状況のなかでですね、おそらく、5年10年の間で日本全体はものすごく変わる、変わらざるをえなくなるとおもうんですが、その前提で、それってどういう変化があるんですかっていうのをとらえた上での大阪っていうのを考える必要あるんじゃないかと。変わるって言うことで、言い尽くされてるんですけども一つはアジアとか世界とのつながりですよ。これが大阪っていうのは強いんですか、弱いんですかっていうのがいまいよく見えないなど。この議論は街づくり的な観点が中心になるかもしれないんですが、世界経済とのつながりっていうのを除いてこれからの都市間競争っていうのは考えられないので、そういう視点っていうのをどれだけ入れられるのかっていうのがひとつ重要だになっていうことと、それと大きく変わるっていう意味では災害の問題が非常に大きいと思います。

東日本大震災の後ですね、地震に関する通説ってのが完全に書き換えられて、太平洋側は三連動地震っていうのを想定しておく必要があるとそういう風に塗り替えられているなかで逆に大阪は湾の奥にはいつているので、実はこれけっこう強みになるんですね。だったらそこは徹底的に大阪にきたら津波の心配はいりませんか、そういうところに、あるいは防災対策では大阪が絶対強いんですよとか。いまは企業はやっぱり移転するときに、もちろんアジアも考えるんですが、アジアもやっぱりインフラ相当弱いですから、どうせ行くなら福岡に行っちゃったほうがいいんじゃないかっていう企業も多い。なんで福岡っていうとアジア、中国とか韓国に近いっていうことなんですね。大阪に行くよりも福岡っていうことがあるんですね。それはさっきいったアジアっていう視点でみてどうかって言う問題ですね。さっき堺屋さんがおっしゃった敦賀とか金沢とか、日本海側とどうつなぐのかも結構重要な視点でですね、そのつながり方が名古屋につながれちゃうとですね、向こうは名古屋に取られちゃう懸念もあるんで、早く大阪につながなきゃいけないっていう視点もあって、そういうアジア内っていう話とそれから何か劇的に変わるところっていうのはなにかっていうことでさっきいった防災の話、それからエネルギーですよ。これはこれから大阪で大きな方向性を出していくと思うんですけど、こちらへんを核に考えたときに街づくりっていうのにどういうふうに反映していくのかっていうのが非常に重要だと思うんです。

それから、みなさんおっしゃったとおり、何をやるかっていうのを早く考えたほうがいいと思います。

(原顧問)

私はこの今回の件ではじめて大阪に深くかかわらせていただいて、まったく大阪ビギナーなものですから、具体論を差し控えたいんですが、古賀さんがおっしゃられたことでもあります、アジアのなかで大阪っていうのが一地方都市になってさびれていってしまうのか、あるいはアジアの中心地という位置づけで再興していくのか、ってそういう局面だと思いますので。それを考えたときにどこをどう売りにして成長していくのを考えると、いまさらものづくりとかではなく、アジアの本社機能を含めたオフィス機能をいかに誘致していくかということじゃないかなと思うんです。そこがターゲットだとす

るとやることはわりと明確で、賃料を含めたコストをいかに下げるか、利便性だとか安全性をいかに高めていくか。そういうことだろうなと思います。

ビギナー的というと、見ていて思うのは、ちょっと分散し過ぎているという問題があると思います。オフィス機能とか都市の機能、オフィスという意味での都市の機能というのを考えるといかに集約して、その中で仕事をしやすくするか、利便性を高めるかっていうのが大事ですから、そういう意味では、ここで会議をやっていること自体が負の象徴っていう気がしていて、おそらく府庁のみなさん、市役所のみなさん、片道30分かけてここに会議をしにこられているんだと思うんですけども、そういうことを含めて、どこにいろんな機能を集約していくのかっていうのを考えないといけないということだと思います。

(松井知事)

ぼくは先ほど堺屋先生がおっしゃっているのに大賛成で、しっかり働ける世代が集まってくる都市を大阪に造るということなんですね。これは、日本中でその働く世代が減っていくわけですから、これは少子高齢化のなかで、日本中から都市にその世代が集まってくるってこれは、まずは、東京なんですよ。まあ、日本の経済をこれから支えていく都市っていうのは、先ほど古賀さんから福岡の話もありましたけども、そのひとつには大阪は必ず入りたい。東京、大阪、名古屋というなかのそこで支えていける企業集積という都市づくりをしたい。それをするとそういうやっぱり仕事を求める人たちは、自然に集まってくると。そこで、集約のなかで具体的に各論でいうならば、東京から1時間の高速中央リニアをこれはもう当面の目標として、必ず手をあげて、東京大阪間でしっかりメドをつけてというのを、もちろん、国政の話ありますけど、大阪側からもまず駅の位置はここですよというメッセージを出して、これはもうJR東海がやってもらうにしても、全面的に行政がバックアップしてやっていきますんでというメッセージをだしていく。そのことでさきほど先生からもあった、それを中心に集約して、どういう都市を、まちづくりしていくのかと、そこで次の世代が集まってこれるということ的前提に堺屋先生がいわれるように教育の部分の次の世代が今度子育てするわけですから、その次の世代が子育てしやすいように定着してもらうようなまちを考えていくと、というのが考え方としてはランドデザインの中心にあるのかなというふうに思っておりますけど。

(堺屋顧問)

都市のランドデザインっていうのはやっぱり最初に概念が必要なんですね。行事をやるとき、大きな行事や事業をやるときには、まず、全員がひとつの概念を共有しなければいけません。いままで40年間大阪を見てきて、どうも概念の共有性がないという問題があります。それからもうひとつは、職員も含めて府民の間にやっぱり負け犬根性があると思うんですよ。東京にはかなわんというようなね。そういう負け犬根性をなくすために、明確な目標を設定する。これが都市のデザインの第一だと思うんです。プロデュースの十段階法でいいますと、まずは意思。どういう街にするかという意思をはっきりと決定しなければいけない。私はそれは、成長都市であり、便利な都市であり、安全な都市であると。そして、なによりも楽しいまちを造る。これが、総論賛成、各論反対になりやすく、総論ではいいけど各論になってくるとたとえば若い人を入れると

きに外国人をどう考えるかっていうのはたちまち大問題になるわけですね。これは積極的に、日本の国法はもちろんありますけれども、そのなかで積極的に受け入れるんだというような概念を造っていく。そして、観光としても目玉のある観光、大阪駅なんかやっぱり、有名なところはもっともあって、観光バスが復活するようなまちを作る、そして、平凡なものは造らない、そういう明確な議論をする必要があると思います。大阪の街づくりに参加したいという有名な人、安藤さんとか喜多さんとかおりますから、そういうふうな世界的な水準の議論を展開したほうがいいとおもうんですね。行事でも最近の大阪の行事っていうのは、やりたい人ばかり集まってるんですね。見たい人があつまる行事じゃない。だから大阪の行事は観客が来ても全国報道にならない、そういう状態になっている。これはやっぱり大阪自身で大阪府、大阪市の職員を含めた大阪自身で代理店に頼らずにやっっていかなければいけないとおもうんですね。目標値をきちんと定めまして、たとえば経済成長率は3%、観光客はなんぼに増やす、宿泊者をなんぼ増やす、そのためにどういうようなところに重点をおいて、ほかは暫時中止する、変更するというようなことをきちんと造らないといけないと思うんですね。北ヤードも残念ながら品川の古手みないなものが建つとるわけですね。やっぱりあれだけの場所にあれだけの土地があったら、全国、全世界から人が見に来る名物にしなければいけない。市長さんもおっしゃっている緑地と経済性を同時に満足させるもの、そういうものを励んで作ると、そして、それは、全世界の人が見に来るものにしたい。そういうものを市民の生活の底上げと同時に、やはり、象徴的、大阪のシンボルを作らんといかんと思うんですね。東京で大阪に修学旅行にいったら通天閣しか見るとこないという状態では困るんでありまして、そういうグランドデザインを、プロジェクトチームを作ってください、すべて費用のかからないように、ペイする行事を積み上げていくと、これが大事なことだと思うんですね。どうも、高度成長時代の癖で、官の支出に頼りやすいところがありますが、そこはどうかやれば官の支出を減らして収益を増やせるのかということと同時に並行的に名物作りを進めていく。一般的な利便を高め、安全性を高めることと、その象徴としての都市の発展を促す、その両方がいると思います。

大阪のすべての人たちに貢献をしてもらいながら、こういうグランドデザインをプロジェクトチームで数ヶ月の間に作ったらどうか。その安藤さんのような人も、喜多さんのような人も非常に期待しておりますから、ぜひそういう一流の人たちのPTも立ち上げてもらいたい。

(松井知事)

いまの堺屋先生のグランドデザインのこのペーパーがまさに概念やと思いますが、上山先生がさっき、いわれたように各論の積み上げがグランドデザインになると。

(上山顧問)

私はこの紙に「グランドデザイン(まちづくり)」となっていること自体に違和感があります。堺屋さんがおっしゃるような内容はやっていいと思うけど、それ以前にソフトなインフラが弱い。ハードなインフラを安藤先生とか入れて、あるいはお金を投資してやってみても焼け石に水だと思う。犯罪の多いまちにきれいなものを作っても観光客なんかこないでしょ。それから地下鉄があんな状態で、人々が日常の通勤も苦勞している状況です。お祭りとか考えられますか。だから私は、グランドデザインを考えたとき

にはやっぱり足元のソフトの正常化、地下鉄はソフトと言い切れないですけど、リノベーションでもあるんですが、そういったところをちゃんと計算をはじいていく。そこに膨大な投資があると思う。それをまともにするだけで十分な回復力があるんじゃないかと思うんです。西日本の首都的な地位を回復する。日本のなかの周りがあまりにひどい、東京はあまりにも傲慢なので、ちょっとまともにするだけで相対的優位性はぐっとあがる。アジアは危ないし、まだ汚いし、不安定だし。そういう意味でこの10年間は残り福っていったら変だけど、正常化するだけで相当有利な地位が取れる。それをやるプランをしっかりと作ったうえで、どっかの土地になにかを作るっていう話をすべきで、それまでは新しいことは封印、禁止すべきだと思う。北ヤードの話は全部やめるべき。大阪は失敗したと現状認識をちゃんとやったうえで次の話をやるべきだとも思う。

(堺屋顧問)

おっしゃることはもっともなんですけどもね、私の経験でいうと沖縄復帰のときがそうだったんです。沖縄が復帰したときに、経済も遅れている、教育も遅れている、犯罪も多い、そういう状況だったんですね。大部分の人は一兆円くらいかけてまずそっちからということだったんですが、私はそれと同時に、むしろ先行して沖縄の観光開発を十分な職場を創って、人口を増やすという大前提でやったんですね。当時沖縄が復帰したとき96万人でした。それが15年間に40万人に減るだろうといわれていたのを観光開発を中心に現在146万人までふえました。それはまず、目玉商品、いわゆるアトラクティブスを作るといって、その基礎的なことと別の問題として、同時並行的にやらなければいけないんです。もちろん教育の水準をあげて、犯罪を減らして、下水道を整備してというのはもちろん大事なんですけど、それは民生でできる。一方において、「あれがあるから大阪がいいんだ」といわれるものを、そういう制度もあれば行事であれハードもあれば、そういうものが同時に必要なんです。そうでないと市民・職員の士気が向上しないんですね。そこをね、例えば沖縄への観光客は復帰前年の1970年には24万人、100万泊しかなかった。その観光客を10年間で240万人、1000万泊いまや、日本一にするための施策を私は海洋博時代にずっとやったわけですよ。それは同時にやらないことには、市民の士気、世間の評判そういうものは上がらない。そのために、儲かる行事をはっきり積み上げていく必要があると思うんですね。そうでないと、上山先生のおっしゃるのは一番正攻法なんですけども、それはやっぱり時間がかかって士気低下につながる。一方でそういう、やるんだっていうことを考えなきゃいけないと思います。今日の私の資料はひとつは法律の問題、ひとつは財政の問題、ひとつは目玉商品、都市プロデュースの問題この三つを早急に発足させる必要があるんじゃないかなと。

(橋下市長)

税金を使って大規模なものを造っていくっていうのは財源の問題もありますから、民間がやる分にはいいと思うんですけど、行政的には新たなまちづくりってかいてあるのはほぼそういう視点が網羅させているので、ただ、目指すべき概念として堺屋先生のイロハニの個別具体は別としてもですね、これはみんな目指すところの概念としては一緒、合致するんじゃないでしょうか。

(小河副知事)

いいですかね。これから作業するときの考え方なんですが、もちろん堺屋先生の大きな目標、大都市ビジョンを立てるのも大事です、上山先生のおっしゃることも同じ思いでありますので、やっぱり、いまの現状、大阪市の流れですとかを考えると、いままですでにかかなりのストックがあるんですね。それはいままで造ってきた、どちらかという右肩あがりの供給者側の論理、われわれが、さきほど堺屋先生おっしゃったようにやりたいから造ってあると、半分はね、需要がなかったらいいけど。それを見直しますと、海洋都市の素案、できてしまっている部分は同じなんですね、ところが作る時の論理で法律が違うとだから料金バラバラなんですね。公営住宅もおんなじなんですね。造る側の論理できてる。それを利用者側からみたら同じものじゃないか、それをひとつにすると、考えてどう見ていくか、鉄道については、私鉄は昔は、いま見ると、レールがあって電車があるという上の部分、細部は別にしましてね。そう見てるのは近くの人なんですね、レールと電車っていうそしたら民営化される、民営化っていうのは目的でなく手段。なにかっていうといままで供給者側から来たけども需要者側からみてどう便利にするか、大阪の町を便利に、すみやすくするかかどうか、ひとつの運営体で考えるべきではないか、そういうソフトな部分もやっていく。それは法律改正がいりますから、そういうことを打ち出していきたい。もうひとつ、北ヤードもそうかもしれませんが、単にいまどうこうするというのを我々じゃなくて、こういうところは、昔の森之宮もそうですけれども、砲兵工廠のあとで、アパッチ砦でわれわれいけなかった、そうところを放置して、当時はあそこに公共が手を入れて利用してたわけです。今となったらものすごいいい土地、それをわれわれがこうするんだと決めるのではなくて、これはやっぱり提案をもらってやっていけばいいと。今回われわれまとめるのは、そこをそういう形で北ヤードについてもこれからいろんな意見をもらってやりましょうというレベルで止めて、いろんなこういうところで、先生に別に議論をしてもらうんがいいのかとおもっていて、その方向でないと、われわれがいろんな先生を集めてね、北ヤードの二期をどうするなんていうことになる、到底、いまのスタッフとか私の範疇をはずれまのでね、そこだけ了解いただきたい。

(橋下市長)

そこは体制として、局長がいわれるように体制は造っていきたい。

(北村局長)

府と市の体制をいうことでしょうか。

(橋下市長)

とめるところはとめる、やるところはやるという説明をさしあげないと。

(松井知事)

とめるところはとめる、やるもんはやるということで。

(小河副知事)

今日も本当に、各方面というか、各断面でご意見をいただきましたんで、それをうけ

てわれわれが後ほど整理して、このペーパー上では3月に骨子案ご議論していただくということにしていますけれども、もう少し早い時期にもう一回ご議論いただけるような形で進めていきたいと思っています。

(山口PT長)

すみません、あの、司会を預かるものとして、もうひとつ議題がありますので、かなりご意見をいただいでですね、われわれ事務方のほうでもですね、整理をしなければいけない課題がありますので、今日ちょっとご了解をいただきたいのは、作業チームを走らせていただいで、今日いただいた意見をもう一度整理をさせていただいて、まあ、当初予定では3月になってしまったけどももう少し早い段階ですね、もう一度進め方とか課題の置きかたとかご議論をいただくということでお願いできないでしょうか。

(松井知事)

計画調整局長、いまの工程見てると、23年度、22年度からいろいろ予定されてこられて、先程から話しありましたようにやるかどうかも含めて議論をしないといけないのでは。

(北村局長)

グランドデザインのほうの、イノベーションヴィレッジ、そちらのほうについてはもっと早く進めて行く必要があると考えています。

(上山顧問)

時間がないっていう中で一言だけイノベーションヴィレッジ。これ、資料がすでにあるんところでオープンになっていて、新聞なんかでも報道されていますが、一点、違和感あるのは大学等が入るといところです。大学が入って産学連携するのにお金を出す必要があるのかどうか。もちろん大学は非営利なんであそこに入ろうと思うと自分では賃料が賄えないというのは分かる。しかし、どっかから補助金をもらってくればいいのではないかと思う。家主側っていうか誘致する側がお金を出して大学が来ないところが成り立たないのか疑問です。大阪府立大学がなぜ来ないのかっていう問題提起もひとつしておきますけど、それはともかく、お金を払って大阪駅前に大学が来て何をやるのかがよく分からない。大学が来るっていうのは何が来るか、そこで授業をやるのか、あるいは理科系の研究やるのなら設備が必要でこんなとこ絶対によくはないし、何をやるのかっていうイメージがいまひとつよく分からない。

(山口PT長)

ちょっとまだ議論はまだ尽きないとおもうんですが、今日事務方が出した原案の部分で、ご了解いただきたいのは作業チームを発足させると、そのうえで、今日のご議論をいただいで、もう一度、工程とかも含めてこの場でご相談をさせていただくということやらせていただきたいと思うんですけども

(橋下市長)

グランドデザインのほうは、視点のところは、ほぼこれでまったく、いまの意見を聞

くと問題がないと思うんですけど、要は概念のほうで成長、便利、楽しいというところは僕がいつも都市魅力の創造にも関係があるってところで、要は成長っていうものをめざすかどうかなんですよねだから、それに行くのかももう縮小でもうしょうがないっていうのかっていえば、やっぱり大阪は成長を目指していくっていうのは明確に位置づけて、それで、都市構造を考える。ただ、便利で省エネ都市っていうのも目指していかないといけない。都市構造を考えるときに。知恵が集まるっていうのは、ソフト面なので街づくり系じゃないんで、別のデザインでやりますけども、楽しい大都市っていうのは、魅力あるっていうのは、北ヤードの使い方とか森之宮の使い方っていうのがきまってきます。成長都市っていうところで、安全っていうのをこのなかに入れられているんですが、安全はちょっと別項目でですね、大阪府知事時代にいつも思っていたんですけども防災に強いっていうところは成長のひとつなのかもわからないですけども災害に強いっていうのはちょっとひとつ別項目にしてもらって、概念は成長を目指す、便利、交通も含めて便利で省エネ、魅力ある大都市で、その概念をやるためにあらたな街づくりの視点で上山先生のおっしゃる既存ストックの活用、いつも僕らがいつている、既存ストックの組換えとか、いまあるものの整理っていう視点で、そういう成長、便利、利便性とか、魅力あるっていうものを目指していくということで、そういう方向で、手法は。視点はそうなんですけど、目指すべき方向性は価値はいまの、項目、細目は別として、それを目指すために地下鉄をどうするんだ、森之宮どうするんだ、うめきたどうするんだっていう方向にもっていつてもらいたいですね。ただ、成長は目指すという。

(山口PT長)

わかりました。ただいま副本部長の指示を受けてですね、作業チームを発足させていただいて、もう一度喫緊にかけさせていただくということで確認をさせていただきます。

(橋下市長)

上山先生がいわれたように僕もずっといつているように御堂筋いっぼんていうのは違うとおもうんですね。特にベイエリアサイドのほうが本来であれば都市としてはベイエリアの価値をもっと高めなきゃいけないのに、弁天町を含めたベイエリアを含めてちょっと大阪市の街づくりの方向性がうまくいつていないんじゃないのかなっていう思いがありまして、その考え方っていうのは大阪市にあったんですかね。御堂筋中心にしたような。

(北村局長)

一言だけ申し上げれば、御堂筋を中心とした一極一地区構造にしかなくてないというのはマイナス面かなと、なにわ筋、新なにわ筋という南北にでて臨海部に近いところがありまして、そこに企業を誘致をやっていこうという発想のもとでいつていすすんでいこうという考え方はありました。そのためになにわ筋のところに地下の埋設物とかいれてたんですね、そういうことの指導をしていた。

(橋下市長)

そちらのほうに、御堂筋の一軸化をもうちょっと広げていくっていう形になれば8号線の今里筋線なんていうのは市議会の議論で延伸をやれなんて話がこのグランドデザイン

ンの方向にいけば、それをやるよりはまずはなにお筋をやるべきじゃないかという議論になるんで、御堂筋の一軸っていうものをもうちよっと面の方に広げていくっていうのを府でやっていたんでそういう方向も打ち出すべきなんじゃないでしょうか。

(堺屋顧問)

皆さん方でプロジェクトチームを発足してもらうのは結構ですけども、私としては、出てきてこういう場で審議するだけじゃなくて、もっと深く皆さん方の計画作りからタッチしていきたいと、そういうまあ、いままで、大阪市の計画、40年間出てきたのを見てみると、みんなおんなじようなところがありますので、やっぱり、こういう概念のもとで、深くかかわって行きたいという思いはありますね。

(山口PT長)

それはまたわれわれ事務方のほうで設定させていただいて、計画作りからご助言ご指導いただきたいと思っておりますのでよろしく願いいたします。

(橋下市長)

概念は、堺屋先生のこれでいかさせてもらって、視点としては上山先生のおっしゃっている、ぼくらもずっといっていたストックの組換えとかそういうことで目指していく、地下鉄の民営化も。

(上山顧問)

お金の使い方の問題、どっちかっていうと。

(橋下市長)

そうですね、地下鉄の民営化っていうのは、ある意味ストックの組換えの話だと思うんですよね。いまあるものを経営形態を変更するということで、視点はこうなので、そういう形で整理していただいて、うめきたも。

(山口PT長)

今日は、1の3のイノベーションヴィレッジについては、次回あわせてやらせていただくということで。

(橋下市長)

今問題となっている場所が、堺屋先生も上山先生もご認識いただきたいのは2ページのところの、大体、これが今、低未利用の公共地を活用した、課題となる拠点が、要は、うめきたと中之島、森之宮、市公館っていうのは大阪城周辺でね、川口地区、いま問題となっているのはこれだけあるということですね。で、ただ、これ次また御堂筋を大阪全体の軸とした街づくりというのは個別課題になるんですかね。

(北村局長)

上山先生おっしゃったように個別の課題でやっていかないとしんどいなという部分もありますので。

(橋下市長)

魅力のところでは、堺屋先生、魅力ある都市っていうのは、ハード面の街づくりの部分もあるんですが、橋爪先生を中心に部会で、堺屋先生もはいつていただきたいんですが、都市魅力の部会っていうのを作るの。

(堺屋顧問)

それは、大変大事なことで、並行して、注目を浴びているときに、やっぱり変わるんだということを明確に示さないかんと思います。できるだけ、大きな行事、小さい行事をたくさんやるんじゃなくて、大きな行事とまとめていくことも必要だし、それから民間活力をいかにだすか、金の儲かるような行事を作っていくことが大事だと思います。

(橋下市長)

喫緊の課題のうめきたをですね、大阪市議会のなかの議論ではあそこは開発利益を狙うべきじゃないかっていう議論と、僕は、一回抱きかかえて、緑にすべきだと思っていて知事もそうだと思うんですけど、それを決めるときの何か軸が必要になると思うんですね。上山先生の、概念はこうなんですがまちづくりの視点ってことで、パチッと既存ストックの組み替えとかですね、一回大規模なやつはちょっと待ったをかけるとかそういう視点があると、それをもとにあそこをどうするか、というのが決まってくるんで。そういう軸はほしいなと思っています。うめきたについては市議会のなかでは開発すべきだっていう議論が多いですんでね。イノベーションビレッジについてだけ、若干5分くらい、15分くらいできるでしょう。条例はもう議論はいいでしょう。

(山口PT長)

議論はいいですけどもキックオフということで、一応条例で書き込むべきことをこの場で説明しますが、これでそれぞれの議会と調整させていただきたいということと、堺のほうに働きかけをしたいと考えてございまして、そこの点だけご了解いただければ事務的にやらせていただきたいと思っています。

(橋下市長)

条例案については、非常に専門的なところなんで原さん中心にアドバイスいただいてあとはやっていただいて、こういう条例案を出していきますよということで。

(山口PT長)

本部長、よろしいですか。

(松井知事)

僕も府庁で説明受けてるし、市長も説明受けてると思うんで、原先生、よろしくお願ひします。

あと堺だけこれでもう本部としてこの方向でまとめますんで堺も足並みそろえてもらうように連絡いれといてもらえますか。市長には連絡いれてますから。

(山口PT長)

それで、ちょっと、条例は片付けさせていただいて。

(橋下市長)

イノベーションヴィレッジについて、ちょっと聞いてもらっていいですか。知事に聞いていただいて、そういうものが大阪全体でどうなっているか、本当は、個別課題なんですけど、僕が判断迷ってる部分もありまして。

(北村局長)

先程堺屋先生からもありましたように、知価都市、知的創造拠点というのがナレッジキャピタルでございまして、先行開発区域、2期とは違うところでやってるということです。民間のほうで、1ページの左にありますような施設類が既に8万8000平米の床面積で出てきていると、その足りない部分と言うか、補完しあう機能をイノベーションヴィレッジで作っていききたいなと思っています。2ページのほうで上山先生からご指摘のありました、大学とか研究機関に入っていただきたいと、誤解のないようお願いしたいのは、一番左に事業の枠組みのところを書いておりますけれども、ナレッジキャピタル8万8000平米のうち5000平米の床を大阪市が借りて施設として作っていききたい。そのうち、下の方に事業費がありますけれども床を借りる金として大きな幅がありますが2、3億円かける。それで、イノベーション支援事業等というのは、これは実は大阪市の事業としてやっていくと、大学に渡すというのではなくて大阪市の事業としてやっていききたいと思っております。

ただ、その賃借料、2、3億円かけた床を無償で大学及び研究機関に提供をしていこうというのが私どもの考え方になっております。ただ、こういうことの事業はいいのかなどうかということについて、三番目に書いておりますけれども、一般的に言えば事業費に見合った整備効果と業績の検証が課題になっているかなと思っております。細かくは説明しませんが、私どもとしては、開業後も見据えながら、下のほうにありますPDC Aのシステムを導入しながら、大学や研究機関がきちっと仕事をしているかということの評価なども一定入れながらやっていききたいなと思っております。

トータルとしまして、さっき申し上げました、賃料と大阪市の事業費合わせて最大で6.5億円ということになってございますけれども、概算の試算をいたしますと、一応大阪府のイノベーション向上に寄与する活動ということで、経済的効果は約250億円ほどの効果があると、6.5億円を投入して、250億円ほどの効果があるのかなと思っております。

(橋下市長)

なぜ皆さんにお聞きしていただきたかったかということですね、部局から来て僕が待ったをかけたのは、北ヤードのところですね、古賀さんは初めてかも分かりませんが、こういうパンフレット、すごいこういうビルが建つんですよ、これは必ず建つんです。ここにいろいろテナントが入るときに、大阪市が借り上げて、運営費とかも入れて、このさっき言った大学を全部集めてくるという形のことを今やろうとしていまして、待ったをかけたのは、その効果とか、どうやって検証するのか、それがいいのか悪いのかどうするっていうのを話をしたのは、PDC Aがきちっと確立していなかったんですね。とりあえず集めてくるっていう話だったんです。それだけの場所なんだったら民間に開

放してしまって、市場原理に任せて、賃料が入ってくる人に入れさせたらいいんじゃないのかなって思うんですが、なぜ大学を集積させることに意味があるのかってことは、しかも大学っていっても、何平米でしたっけ、ひとつの大学？

(山口PT長)

市長すみません、市の職員も1時が、議会があるんで、両局長も席を立たせていただきたい。こちらの段取りが悪くて申し訳ないんですが、今日はそういう事情ですので、すみませんが、次回にですね、もう一度ちょっと仕切りなおしをさせていただく。

(堺屋顧問)

ちょっとだけ言いますとね、私ね、早稲田大学は日本橋本校に、日本橋のコレドっていうところに早稲田大学はこれくらいの規模のものを借りているところの代表をしているんです。日本橋のコレド、三井不動産のビルの5階を全部借り切って、金融大学院っていうのをやっているんです。

東京の日本橋。その立ち上げのときから代表をずっと務めておりまして、家賃を少し安くしていただいておりますが、ちゃんとお金を払っています。入学者は定員の5～6倍は常に保って試験をしております。ここが一番ポイントは、理科系がこういうところに向いているかどうかというところがポイントなんですね。金融大学院みたいなものならそういう経験がありますから、大体何時から始めてどういう学生が来て、いくら、現在は、年間165万円ですか、それくらいとってるとどれくらいの人がかかるのかっていうのは分かります。これ作るのに10年かかったんですけども、10年経って、かなり有名な人も卒業生に出ていますけども、そういう理科系を作るとなるといいのかどうかっていうのはちょっと私も考えあぐねるところですね。

(橋下市長)

計画調整局の皆さん前に座ってもらって、ちょっとせっかくなので、これ議論させてもらえれば。大学集積させて。ちょっと説明を実務的にしていただきたい。どういうテナントのために大学を集積させるかっていうことを。

(松井知事)

大学の誰が来て何をするのが全然分からない。学生集めて大学院やるんだったらまあそれなりに意味は分かるけど。

(橋下市長)

大学を集めるっていうのが、もともとテナントをあそこにどういうものを。

(山口大阪市計画調整局科学技術振興部長)

すみません、ナレッジキャピタルのテナントってことですか？

(橋下市長)

全体の目標というか、なぜ大学を集積させるのかを。

(山口部長)

ナレッジキャピタルを作るっていうことが大阪駅北地区まちづくり推進協議会のほうで決まっております、それは事業者が実施する事業でございます。これは全体の構想ですけれども、このUR作成の「うめきたプロジェクト」パンフレットの右の端にナレッジキャピタルを作るということが書かれておりますけれども、まちづくりの計画の中でまず位置づけられております。大阪駅の周辺というのはオフィスと商業施設が集まっておりますので、それとは違った機能を導入して、知的創造がここから波及していくようなことをやりたいというのがもともとこの構想であったと理解しております。で、ここには今のパンフレットに「あつまる」「つくる」「まじわる」と書いておりますけれども、こういった機能を集積させていけばそういう循環が起こってですね、周辺に波及するというのを考えて構想が作られております。いま、上山先生が示しておられました、小さいほうのパンフレットですけれども、開発事業者が直営で行う事業でございます。そこで見ていただくと分かると思うんですけれども、やはり、民間の事業者さんがされる事業というのは、情報の交流でありますとか、あるいは、情報発信でありますとか、集客ですとかそういったことを中心に取り組んでおられます。その中で、今のプロジェクトの「つくる」という機能をどう集めてくるのかというのが課題になっておまして、やはり、今、先程ものづくり企業のお話がありましたけれども、いろいろなイノベーションを起こしていくために、オープンイノベーションの考え方、いろんな技術を集めてくる仕組みがあるというのがいろんな委員会をしていく中でご意見ございましたので、そのオープンイノベーションをどう実現していく、プラットフォームを作っていくかというのが今のわれわれの事業のベースでございます。

(橋下市長)

ナレッジキャピタルをやりますよっていうことが決まって、うめきたで、このビルでやりますよってなって、ナレッジキャピタルはもともと民間がやる前提なんですよ。事業者は。

(山口部長)

そうです。ここ自体は、そのKMOは開発事業者が作りました会社で、ナレッジキャピタルの企画運営会社でございます。

(橋下市長)

それは市は出資とか？

(山口部長)

しておりません。

(橋下市長)

してないですね。ナレッジキャピタルっていう純の民間がやる会社があって、そこから今度大阪市が床を借りるわけですよ。

(山口部長)

床についてはですね、局長に説明してもらったほうが良かったと思うんですけど、開発のときに、ナレッジキャピタルを作るためにですね、開発利益を乗せない形で民間事業者に売却をしていただいているエリアがありまして、それがBブロックです。そこを作るためには、そのスキームはナレッジキャピタルに周りとは違った低廉な家賃で、ある程度非効率な、儲からないところに入っていただくことができるようにしようということで作っております。

(橋下市長)

開発利益をのせずに、安い賃料で、そこには民間で入ってきてるところはあるんですか？

(山口部長)

開発をする前にまず事業者、入居希望者に手をあげていただいて、その人たちをまず中心に、ナレッジキャピタルをどう作るかっていうことで、企画を出していただいて、落ちているのもありますが、残っている事業者さんもあります。

(橋下市長)

それはどういう事業者なんでしたっけ？

(山口部長)

具体的な契約がどこが済んでいるかというのは、民間開発事業ですのでわれわれは承知しておりません。

(橋下市長)

業種とかそういうものはどうなのかが。

(山口PT長)

すみません、司会段取り悪くて、もう一度、ギリギリのタイミングとして先生方もそうなんです、12時半ということなんでそこで切らせていただきますので、すみませんが、いまの質問に答えていただきたい。

(山口部長)

いま私の把握している範囲では、医療機関、ハウスメーカー、事務機メーカーや、通信事業者など大手のところはだいたい決まっております、中小のところはこれからですね。小さいほうのオフィスに知的創造を支援する機能に入っていただくようにテナントリーシングをしていくというふうに事業者さんから聞いております。大きいところから、下のほうから決めていく必要があるということで、そういうことをすると聞いております。

(橋下市長)

そういう前提で、なぜ、その大学とかその集積を行政が。

(山口部長)

まず、大阪駅の周辺ではですね、サテライトキャンパスは結構あります。文系では、市場原理に合うということで入ってきていると思います。理系はおっしゃるようにここは研究の機器を置くことができませんので、なかなか厳しい状況にあると思っておりますけれども、今回の企画の中心はICTが中核となっておりますので、ひとつはICTの本体のほうは、スーパーコンピューターなどは大学のほうにあって高速回線でないでここで利用できるようにするというのが1点でございます。

それとは別に、ICTを基盤に健康の関係でここに来られる来街者のみなさんのデータを集めて、医工連携ですとか、あるいは予防医療ということで事業を展開しようと、学術的知見を技術開発、製品につなげていこうという動きをしようというのが2点目でございます。大きな柱は、その2点で、慶応大学のほうは、そういったものづくりのアイデアを形にしていくコンサルティングを中心にされると聞いております。そういったことで、皆さんの大学の中に持っておられる知見をここに発揮していく場所として、大学と企業がここで技術を混ぜ合わせて商品化する機能を持たせたいというのが中心的なコンセプトでして、それをやっていく上で、今賃料を負担しているとおっしゃっておられますけれども、実際はほとんど、まだ金額は決まっておられませんけれどもナレッジキャピタルの中でも最低金額になると思いますし、それはわれわれの創造活動を事業者が評価すると言っているということでございます。それからもうひとつは、大学のみなさんの働きを金額換算しますと、賃料以上は機器も設備も持って来て先生も来られますので、われわれが直接われわれの大学やあるいは研究所をするよりは、相当コストは低くなるかと考えておりますので、みなさんの知的見識を活用できる場を作りたいというのが中心的なコンセプトです。

(堺屋顧問)

この話はURからももう3年ぐらい前から20回ぐらい聞いているけどもどうも理解できないですね。

(古賀顧問)

僕は産業技術総合研究所っていうところにいたことがあって、この手のプロジェクトは日本中で星の数ほどあってですね、ほとんどのところは活動は低調になっちゃっている。ここは場所がいいので、そんなに低調にはなるっていう可能性はないかもしれないけれども、さっき議論していた中で、ちまちましたのはやめたらどうっていうのにまさに該当するんじゃないかと思ってまして、もしやるのであれば、もっと大掛かりな仕組みとして、大阪だけじゃなくて、日本中からそこに集まってきますよというようなインパクトのあるものだったらやってもいいと思うけれども、この程度のことならやってもやらなくてもいいかな、という。

(松井知事)

医工連携でいろいろと知見をとって、健康に役立ってるっていうのは、たとえばどのあたりに協力をしてもらって知見をとる？

(古賀顧問)

これやるときに具体的にこういう有名な人がここに拠点をおいてやってくれるとか、そういうような、なにか、ものはあるのかどうかですけれども。

(山口部長)

それはあるんですけどもちょっと次に。

(山口PT長)

すみません。司会の段取り悪くて申し訳ないですが、現状を把握していただいたという事で、その上で、次回ご議論いただきたいと思っております。時間がまいっておりますので、最後に本部長一言だけ。

(松井知事)

ほとんど、いろいろノーペーパーで、委員の先生のご意見も出まして、時間を忘れるという会議が、まさに統合本部会議だと思います。ちょっとまあ、前回の会議で週一ペースでやりたいと思っておりますけれども、週一ペースで丸半日やらんと、どっかでやっぱり昼からは、遠いんですけども先生方すみません、集合していただいて、そのままちょっともう、その日はそこで議論を尽くすというふうな形でちょっとPT長のほうで、そういう設定をしてくれますか。

ある一定6月くらいまでいろんなものが出るまでは、半日は十分かかりますよ。

(山口PT長)

それでは、いまご指示もいただきまして、今日は段取り悪くて申し訳ありませんでした。これで終了させていただきます。次回また連絡させていただきますのでよろしくお願いいたします。